

日本語

総督邸 (GOVERNMENT HOUSE, SYDNEY)

GOVERNMENT HOUSE
MACQUARIE STREET
NSW 2000
AUSTRALIA
www.hht.net.au

電話 02 9356 3022
ファックス 02 9357 7176
インフォライン 02 8239 2442
info@hht.net.au
テレックス 02 8239 2377

他の歴史的建造物: エリザベス・ベイ・ハウス (ELIZABETH BAY HOUSE) | エリザベス・ファーム (ELIZABETH FARM) | 旧総督邸 (GOVERNMENT HOUSE) | ハイド・パーク・バラックス博物館 (HYDE PARK BARRACKS MUSEUM) | 犯罪博物館 (JUSTICE & POLICE MUSEUM) | メルーガル (MEROOGAL) | 旧総督邸内シドニー博物館 (MUSEUM OF SYDNEY ON THE SITE OF FIRST GOVERNMENT HOUSE) | ローズ・シードラー・ハウス (ROSE SEIDLER HOUSE) | ラウス・ヒル・エステート (ROUSE HILL ESTATE) | スザンナブレース博物館 (SUSANNAH PLACE MUSEUM) | 造幣局とキャロライン・シンプソン図書館・調査コレクション (THE MINT AND CAROLINE SIMPSON LIBRARY & RESEARCH COLLECTION) | ヴォークルーズ・ハウス (VAUCLUSE HOUSE)



HISTORIC HOUSES TRUST



概史

総督アーサー・フィリップ(Arthur Phillip)は、1788年1月にシドニー・コーブ(Sydney Cove)に最初のヨーロッパ人の植民地を設立した直後に、シドニー最初の総督邸(Government House)の基礎を築いた人物です。この邸宅は、最初の50年間、植民地の政治、儀式、社会の中心となっていました。旧建物は、現在の総督邸が完成した1845年に取り壊され、シドニーのブリッジ・ストリート(Bridge Street)にある旧総督邸(First Government House)の敷地内のシドニー博物館(Museum of Sydney)がその記念となっています。またこの博物館も、ニュー・サウス・ウェールズの歴史的建造物信託財団(Historic Houses Trust)が管理を行っています。

1816年に、総督ラクラン・マッカーリー(Lachlan Macquarie)は建築家フランシス・グリーンウェイ(Francis Greenway)に新しい総督府と厩舎の設計を依頼しました。建物にかかるマッカーリーの情熱で、英国政府の資金が底を付くのではないかと考えたので、新しい邸宅を建設することができませんでした。1821年に完成した敷地とグリーンウェイの厩舎(現在の音楽学校 [Conservatorium of Music])の独特な復興ゴシック様式の設計が、総督邸の建設場所と様式に影響を与えることとなりました。

シドニーの総督邸(Government House Sydney)は、忙しい公務の予定をこなすために、ニュー・サウス・ウェールズ州の総督が続いて使用していました。公務には、授与式、夕食会、主要な文化団体や慈善組織のレセプション、最高執行委員会(Executive Council)の会議などがありました。1996年になると、この邸宅は、ニュー・サウス・ウェールズ州の歴史的建造物信託財団の管理下におかれることになりました。この財団は、建物や敷地の手入れや改修、各種の公的なプログラム、一般からのアクセス、コンサートや専門家のツアー、現代芸術のイベントなどの文化プログラムを管理しています。

ハウス・ガイド

1 **外側ホール** プロアは、総督邸 (Government House) の入り口を2層からなるオープン・ポーチとして設計しました。1873年には、正門や馬車用の覆いのついた道が増設されたため、この入り口は閉鎖されることになりました。ホールはリヨン・コティエ & Coにより1890年から1891年にかけて装飾され、切り石、装飾帯のステンシルなどが使われました。装飾帯の上部はオリジナルですが、それ以外は1989年に復元されました。紋章は総督邸の装飾にとって大切なエレメントです。外側のホールには、1901年から

1832年には、総督、サー・リチャード・バーク(Richard Bourke)は、新しい総督邸の詳細な建築仕様書を英国政府に提出し、建築家を指名することを要求しました。建設は、復興ゴシック様式の提唱者であるエドワード・ブローア(Edward Blore)に委託されました。この復興ゴシック様式とは、立憲君主国による政府が続くことを表現するために、英国国会議事堂を「エリザベス朝」様式で再建することを決定した結果、1830年代初期に非常に流行した様式です。こうして1834年には、97枚の作業用図面と計画書、建築仕様書一式がロンドンから発送されました。

ブローアの計画書は、植民地の建築家であるモーティマー・ルイス(Mortimer Lewis)により、その敷地に合うような形で修正されました。建設は、1836年9月に始まりました。深刻な経済不況のため、建築費用が46,000ポンドにものぼるこの屋敷の完成は、遅れてしまいました。総督ジョージ・ギップス(George Gipps)卿は、1845年になるまでこの邸宅に住みませんでした。

1879年、シドニー有数の装飾家リヨン・コティエ & Co(Lyon, Cottier & Co)により、シドニー国際博覧会の一環として大広間を応接室として装飾。使用された装飾品の数々はニュー・サウス・ウェールズ州を代表する工芸作家達によるものです。

1912年の間に総督邸をシドニーでの住居として使用したオーストラリアの最初の5人の総督の紋章が飾られています。この期間、ニュー・サウス・ウェールズ州の総督はクランブルック、ブレヴューヒル(Cranbrook, Bellevue Hill) 現在は学校、に住んでいました。

- 2 **内側ホール** 総督邸には19世紀を代表するヨーロッパ、オーストラリアの画家達、チャールズ・アブラハムズ(Charles Abrahams)、リチャード・バクナー(Richard Buckner)、ルシエン・ヘンリー(Lucien Henry)、トム・ロバーツ(Tom Roberts)、ジュリアン・アシュトン(Julian Ashton) による肖像画コレクションがあります。著名なオーストラリアの画家達、ウィリアム・ドベル(William Dobell)、ウィリアム・ダージー(William Dargie)、ブライアン・ウェストウッド(Bryan Westwood)による20世紀の総督の肖像画はこの内側ホールにあります。
- 3 **書斎** 元来、この部屋は補助収容所として使われていましたが、現在では家の西側にある一続きの事務所になっています。1900年には、政府の建築家、ウォルター・リバティ・バーノン(Walter Liberty Vernon)がチューダー・ゴシック様式の扇型の丸天井のついたビリヤード・ルームとして、拡張工事を行いました。1915年以降には、この部屋は総督の書斎になりました。部屋には、芸術・工

芸運動やアール・ヌーヴォー様式にヒントを得たモチーフを組み合わせた、1890年代の重要な事務用家具が一式あります。

- 4 **メイン・ホール** メイン・ホールは、中世のカントリーハウスの大型のホールを思わせます。肖像画や紋章を使って装飾を施しています。植民地の総督は、その地方産出の素材を使うことを勧めたので、ホールは彫刻を施したマルレーン石製の暖炉飾りとオーストラリア産のヒマラヤ杉の建具類があることで有名です。鉛ガラス製の紋章は、1890年から1891年にリヨン・コティエ & Co (Lyon, Cottier & Co) で作られたもので、反対側のブラインドのトレーサリーの紋章もこの会社で作られました。1880年代にオーガスタス・ロフトス (Augustus Loftus) 卿が総督邸に進呈したロシア製のテーブル・ガラスは、東側の壁に据え付けたキャビネットの中に展示されています。
- 5 **ダイニング・ルーム** ダイニング・ルームにある杉製の家具は、1857年シドニーの一流の家具製造者であるアンドルー・レネハン (Andrew Lenehan) が納入した物で、ダイニング用のエクステンション (拡張型)・テーブル、テーブルサイド用キャビネット、回転式テーブル、ダイニングチェアから成ります。このテーブルを完全に引き伸ばした状態にすると、34人のゲストが座れました。その装飾的なデザインは、リヨン・コティエ & Co が1879年にデザインしたものを再現したものです。天井の中央部には、小麦、葡萄、野兎、魚、家禽や果物が飾られ、ダイニングの象徴となっています。暖炉の周囲は、ニュー・サウス・ウェールズ南部で切り出したマルレーン大理石でできています。初期の総督たちは、自分で銀器や皿を持ち寄ることになっていたので、総督邸のコレクションには、質のよい銀器はほとんど残っていません。歴史的建造物信託財団は、ニュー・サウス・ウェールズの一流の工芸家に作品を発注するという政策を進めていきました。2001年には、ダイニングテーブルのセンターピースが銀職人マーク・エドグース (Mark Edgoose) に発注されました。
- 6 **待合室** この居心地のよい部屋は、隣接する居間と一続きで装飾されました。どちらの部屋も、オリジナルのハンドペイントとステテンシルを施した天井は当時のままです。これは、シドニーにある一流の装飾会社、リヨン・コティエ & Co. が1879年に装飾を行ったものです。部屋には、1875年頃にアレキサンダー・ノートン

(Alexander Norton) がオーストラリアの木材 (ユリノキ材、ヒューオンパイン、ブラッシュ・サイプレス・パイン) で製作した重要な一對のキャビネットがあります。また、ベンジャミン・イードルズ (Benjamin Edols) とキャシー・エリオット (Kathy Elliot) による同時代のガラスも見られます。

- 7 **応接室** オリジナルのリヨン・コティエ & Co の天井には、イギリスのラファエル前派の画家であるダンテ・ガブリエル・ロセッティの様式で四季の寓話的な姿が描かれています。ジョージ三世 (George III) とシャーロット女王 (Queen Charlotte) の肖像画は、ジョシュア・レイノルズ (Joshua Reynolds) 卿の工房で製作されたものです。昔から、公式の肖像画の複製画は、統治者の代表に献上されていました。これらの肖像画は、1843年統治者である王の末亡人によって総督邸に献上されたものです。
- 8 **ボールルーム** ボールルームは、元来音楽室とされていました。音楽家が、窓の反対側のアルコーブで演奏していました。1899年には、ボールルームの南側の壁が取り除かれ、舞台と音楽家のギャラリーを増設して部屋の拡張が行われました。ひびの入ったダンスフロアは松でできています。またこの部屋では、副総督の叙任式が行われています。このような機会には、ヒマラヤ杉のドアが壁内の窪みにスライドして収まり、縦の長さが100フィート (30.5m) 以上あるレセプション・ルームとなります。

リヨン・コティエ & Co 製の装飾は、擬ダマスク織りという技術を用いて、最近になり再現されました。型抜き染めした色彩は、壁の上から下に至るまで色調を変えており、絹地の上でまるで光り輝いているかのようです。絵を施した天井は、1879年のデザインを1980年代に複製したものです。

